

大学体育（レクスポーツ）の成績評価のためのルーブリック開発 に関する検討

—学生の自己評価と教員の成績評価との関連から顕在化した改善点—

古田 康生（岐阜協立大学経営学部）
日比 千穂（岐阜協立大学非常勤講師）

キーワード：体育実技、レクスポーツ、ルーブリック、学生自己評価、成績評価

序論（本研究の学術的背景、問題の所在、目的）

1.1 地方小規模大学における大学体育の置かれた現状（現実）

18 歳人口の減少に伴い入学定員が確保できない地方の中・小規模大学が過半数を超え、多くの大学が「生き残れる大学」となるため様々な方策を試行しているのは周知の事実である。他の大学に勝る教育的特色など選択される大学となるための積極的・ポジティブな戦略をとる大学もあれば、規模（定員）の縮小といった消極的・ネガティブな戦略をとる大学もある。その規模の縮小として大学体育が対象となる場合がある。例えば、「必修科目の選択科目化」や「開講科目（種目）数の減少」がその代表例である。通常、大学体育の場合、体育実技やスポーツ科学など同一科目名で複数の授業が開講される場合が多い。すすなわち、「体育実技」という授業名称であっても、履修者数が多ければサッカーやバレーボール、バスケットボールといったように複数の担当教員により複数の授業が実施される。これは施設の活動面積や安全管理、教育目標を達成するために履修学生の身体活動量の確保など教育効果を最大化するに必要な不可欠な方策である。つまり、「100 名の履修学生に対して 1 名の授業担当者が単一種目にて授業展開する」ことは非現実的であり、安心安全で効果が高い授業は保証されないであろう。そこで、必修科目を選択科目化して履修学生数の規模を縮小して開講（種目）科目数を減少させて担当講師数の削減を図ることでコストダウンの方策が実施される地方小規模大学は決して少なくない。

1.2 大学教育でのルーブリック導入の背景

岐阜協立大学（以下、本学とする）では、大学体育の教育的価値を実証するため何（どのような能力）が修得でき、どの程度修得できたか（成長）を客観的に示すための一つの指標として「ルーブリック」を導入している。

現在、教養科目の体育やスポーツといった実技科目（以下、大学体育とする）に限らず、大学教育全般においてルーブリックを活用して学修成果を評価することが求められている。この背景には、中央教育審議会による一連の答申がある。まずは、2008 年の中央教育審議会⁸⁾による「学士力」の提示がある。つまり、学士課程修了段階で大学を卒業した学生としての質保証を目的とした資質・能力の達成状況を学士として相応しい学びができたのか、についての評価がより明確に求められることになった。次いで 2012 年の中央教育審議会⁹⁾による学習成果を把握する具体的な方策の 1 つとしてルーブリックを取り上げ、その研究・開発の重要性を指摘した。さらに、2018 年に中央教育審議会¹⁰⁾は、ペーパー試験などの定期期末試験の評

価だけではなく、学生一人ひとりの学習による能力の達成（到達度）状況を可視化することを求めている。

これらの理由から、大学教育の正課授業の評価において、より客観的で学習者（学生）の大学での学習到達度の評価が可能な「ルーブリック」の効果的な活用が期待されている。

1.2 体育・スポーツ・レクリエーション科目でのルーブリック

一般的に、ルーブリックは評価観点ごとに評価水準の尺度と、その尺度を充たした場合の特徴の記述で構成され、達成水準が記述されることで明確化され、ペーパーテストなどの他の手段では評価が困難なパフォーマンスなどの定性的な評価に向くとされ、評価者（担当教員）と被評価者（受講学生）の認識の共有、複数の評価者（担当教員）による成績評価の標準化などにメリットがある、としている^{1),6)}。

大学教育カリキュラムにおける一般教養に位置づけられる体育やスポーツ、健康といったスポーツ実技科目の大学体育では、授業を履修する過程で、その授業で実施するバレーボールやサッカー、バスケットボール、レクリエーション・スポーツといったスポーツ種目（以下、種目とする）に関するある程度のレベルのスポーツ技能（スキル）を身につけ、それらをゲームや試合にて活用（発揮）して主体的にゲームなどの活動に参加することが求められる。そしてその取り組む姿勢や態度が成績評価の根拠の一部となる。ただし、体力や運動能力、その種目に関するスポーツ技能の初期レベルに依拠した評価は避けられるべきである。すなわち、過去の運動能力やスポーツ技能を獲得した努力は否定すべきではなく認められるが、高等学校など過去における運動部活動などにより元々体力や運動能力に優れ、種目のスポーツ技能を有しているため優秀な成績が与えられるべきではない。したがって、体育やスポーツといった技能を修得してそれを活用（発揮）して学習活動をする科目は、履修学生に対して明確な到達目標と授業を通して習得すべき技能項目を具体的に提示し、さらに、その評価方法が適正に提示されるべきである。そして到達目標を達成しようとする努力のプロセスが評価の中心にあるべきであろう。その評価方法の一つとして有効なのがルーブリックと考えられる。榎本ら²⁾と松元ら⁷⁾は、「大学体育における成績評価方法については評価規準に関する実践的な研究は不足し、確立された状況にない。特に、同一科目名における複数担当教員の体制を取らざるを得ない大学体育において、授業内容や評価方法が担当教員によってばたつき出る可能性が高く成績評価の妥当性を欠く傾向にある」、と指摘している⁷⁾。

1.3 本学での体育実技（レクスポーツ）の課題

岐阜協立大学（以下、本学とする）にて初年次に開講される大学体育の体育実技（レクスポーツ）にて顕在化している課題が3つある。第一に、この科目はカリキュラム上では教養科目に位置づけられるが、公益財団法人日本レクリエーション協会公認指導者資格のレクリエーション・インストラクターとスポーツ・レクリエーション指導者の養成科目の一つとなっている。しかし、スポーツを専攻する履修学生の多くが強化指定クラブに所属する初年次学生であるため、レクリエーション・スポーツあるいは生涯スポーツ（以下、レクスポーツとする）に関する学びが十分でないため、その目的や意義の理解は不足しており、競技スポーツと同様にレクリエーション・スポーツ種目に取り組む傾向がある。すなわち、ゲームで勝ちたい、上手になりたい・上達したい（勝たなければならない・技能ができればならない）というスポーツに対する意欲が強い傾向にある。したがって、スポーツ指導者として多様なスポーツ志向がある事への理解は不足した状態でレクスポーツ実技に取り組む傾向にある。第二は、競技スポーツ志向が強い学生と教職（小学校教諭や中学校・高等学校保健体育科教諭、及び特別支援教諭）志望する学生の間で、取り組み方にばらつき（温度差）が認められる点である。すなわち、競技スポーツ志向の学生では、専門とする種目や高等学校時に経験を有する学修指導要領（保健体育科）に明記された種目であれば積極的に取り組むが、ターゲットバードゴルフやモルック、ふらばーといった初めて経験するようなレクスポーツでは消極的に取り組み、教職希望学生は、スポーツが苦手な生徒を想定した指導法を含め学ぼうとする傾向が認めら

れる。そして第三は、本学の体育実技（レクスポーツ）は、経済や社会福祉、公共政策、看護を専攻する学生も履修でき、公認指導者資格の取得も可能としている。体育実技（レクスポーツ）は、複数（3名）の教員が別々に専攻ごとにクラスを担当している。それぞれの授業（体育実技（レクスポーツ））は履修学生の運動能力や技能のレベル、体力レベル、履修動機も異なるため、履修学生に合わせて授業内容を展開し、評価方法もそれに合わせている。年度当初に整合性は図られるが厳密ではなく、ばらつきが余儀なくされている。

1.4 本学体育実技（レクスポーツ）での共通ルーブリックの採用と活用

2022年度から本学で開講される全ての体育実技に共通するルーブリックが取り入れられた⁴⁾。本学では、体育実技としてレクスポーツ以外にもバレーボールやバドミントン、サッカー、卓球、ソフトボール、トレーニング、ジョギング&ランニングといった種目が開講されており、現時点では個々の種目の「技能」の到達度を評価するルーブリックは作成されていない。したがって、種目に関する「知識・理解」と授業への参加「態度」といった体育実技での「取り組み方」に焦点化して本学独自にルーブリックを作成し、全ての担当教員が理解した上で成績評価に活用している。

1.5 本学体育実技とディプロマポリシー（DP）との関連

ルーブリックを議論する上でディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針：以下、DPとする）と当該科目の関連を確認する必要がある。それは各科目がDPのどの能力を修得させるに貢献しているかを明確にするためであり、各能力がどの程度達成できたかを評価するにルーブリックは役に立つと言える。以下は、本研究で調査対象となる学生が在籍する本学スポーツ経営学科のディプロマポリシー³⁾（学生が卒業時に身につける能力の目標）である。(1) 人文・社会・自然科学や情報処理に関わる基礎的素養を修得し、かつ外国語や外国文化を理解する能力を持つ。(2) 日本人同士、外国人とも共感しあうコミュニケーション能力を持つ。(3) 学校やスポーツ産業の経営に対して、経営学の専門知識を実践的に応用できる能力を持つ。(4) 経営学の諸分野とスポーツ科学の専門知識を体系的に修得して、課題に対して解決できる能力を持つ。(5) 地域におけるスポーツ振興のなかで生じる課題に対して、解決できる能力を持つ。

なお、下線部は、本学の体育実技がそのDPの能力養成に貢献できていると判断できる部分である。概観して体育実技が、単なるスポーツ技能の獲得のための科目ではなく、DPの達成に貢献していることが理解できる。

1.6 本学体育実技の教育目標とルーブリックの関連

1.6.1 本学体育実技の教育目標

本学体育実技は、全種目に共通して5つの教育目標を掲げている⁴⁾。それは次の通りである。① スポーツ文化を正しく理解するだけでなく、身体の諸現象およびスポーツ事象などに対し問題意識を持ち、進んでその問題を解決できる科学的・論理的思考能力を育成する。② からだとスポーツの関わり、健康と体力、保健衛生などについての科学的な基礎知識を理解し、スポーツの実践を通して、非健康的な要因をなくし、心身の健康の保持・増進をはかる方法と態度を育成する。③ 大学生活だけでなく、将来の社会生活においても、それぞれの年齢・年代に相応しい運動処方やスポーツプログラムを自ら作成できる能力を育成する。④ 自由裁量時間（余暇）は労働時間の短縮と平均寿命の伸びとも絡み合っており、ますます増大しつつある。それゆえにスポーツやレクリエーションが日常生活において占める重要性はさらに高まっており、この学習で生涯スポーツに連動する知識と実践能力を育成する。⑤ 体育は、能動的な社会性の育成や人間性の理解に役立つ一つの領域である。この学習に自主的、主体的に参加することによって自己を開発する能力と健全な人間関係を形成する能力を育成する。以上の5項目が体育実技の教育目標に掲げられている。

1.6.2 本学体育実技のルーブリックの評価観点と評価尺度

本学体育実技のルーブリックは、上記の5つの教育目標の達成を評価し、かつ、スポーツ好きになるための観点となっている。そのため、スポーツを楽しむために必要な要素を中心に次の評価観点及び配点が設定されている。それは、評価観点(1):真剣・本気・全力で取り組めたか(30%)、評価観点(2):ルールを守って取り組めたか(15%)、評価観点(3):仲間や相手との良い関わりを持てたか(20%)、評価観点(4):授業の運営への参加ができていたか(10%)、評価観点(5):授業を通じて新たなスキルの獲得があったか(15%)、評価観点(6):獲得したスキルを発揮できたか(10%)の6観点である。図1は、本学学生及び科目担当教員が情報共有し、実際に使用している「ルーブリック」を示した。

この本学のルーブリックは体育実技Aの初回に実施される種目ガイダンスだけでなく、体育実技(レクスポート)の実技ガイダンス(授業2回目:9月)において紙媒体の資料を用いて「観点」と「ルーブリックを利用する目的」を相互で再確認している。また、授業期間終了時(1月)には履修学生自身に自己評価させるために再び紙媒体で示して活用している。本研究は、2024年度後期に開講した体育実技B(レクスポート)が対象となったため、研究開始は9月であり、研究終了は、2025年1月となっている。

2 研究目的

本学の体育研究室が独自に作成した体育実技の「取り組む態度を評価するルーブリック」を用い、そのルーブリックの改善点を検討することを目的とする。

そのため、このルーブリックを用いて履修学生自身による自己評価結果と担当教員による成績評価との相違(関連)を分析する。今回は、研究規模の課題や科目担当教員の相互理解の課題などもあり全ての体育実技種目を対象とはせず、体育実技(レクスポート)のみを対象に実施した。また、得られた結果から体育実技(レクスポート)で顕在化している3つの課題解決に資する基礎的資料を得ることを目的とする。

評価観点	素晴らしい	良くできた	まあそれなりに	全くできない
評価ポイント	4	3	2	1
① 真剣・本気・全力で取り組めたか?	101%の取り組みが感じられる	全力での取り組みが感じられる	可もなく不可もない取り組みである	全力での取り組みとはとても思えない
評価	4	3	2	1
② ルールを守って取り組めたか?(規律)	高いレベルで守れている	守る意識が感じられる	ルールを度々破ってしまう	守るつもりが感じられない
評価	4	3	2	1
③ 仲間や相手とのよい関わりを持てたか	グッドフェロウ(仲間)としての振る舞いが完全にできる	グッドフェロウになるうとしている	グッドフェロウになることを意識しているのが伝わらない	バッドフェロウである
評価	4	3	2	1
④ 授業の運営への参加ができていたか?	準備や片付けなどへ主体的・積極的に取り組めた	準備や片付けをある程度は行っていた	準備や片付けに加わるのが少なかった	準備や片付けを全くしなかった
評価	4	3	2	1
⑤ 授業を通じて新たなスキルの獲得があったか?	非常に多くのスキルを獲得した	ある程度のスキルを獲得した	スキルを獲得は少なかった	ほとんどスキルを獲得していない
評価	4	3	2	1
⑥ 獲得したスキルを発揮できたか?	非常に高いスキルを発揮した	ある程度のスキルを発揮した	スキルの発揮は少なかった	ほとんどスキルを発揮できていない

図1 体育実技で使用したルーブリック

3 研究(調査)方法

3.1 調査対象学生

本研究では、本学での大学体育のレクスポーツ、すなわち体育実技（レクスポーツ）を履修するスポーツ専攻学生 27 名と対照群として非スポーツ専攻学生 22 名を調査対象とした（表 1）。なお、ここでのレクスポーツ科目は日本レクリエーション協会公認指導者養成科目群の一つである。

表1 本研究での対象学生

	男子学生	女子学生	小計
スポーツ専攻学生	19	3	22
非スポーツ専攻学生	17	5	22
小計	36	8	44

単位:人

3.2 調査内容(項目)

- (1)基本属性：専攻、学年、年齢、性別
- (2)本学体育実技のルーブリックによる取り組みの自己評価

3.3 質問紙（ルーブリック）調査の手順と方法

ルーブリックによる体育実技（レクスポーツ）における取り組みに関する学生自身による自己評価の調査は、図 1 の調査票により記名自記式質問紙法を用いた。質問紙の配布は集合配布とし、本学講義室及び体育館にて依頼文書および質問紙を配布して文書と口頭により研究主旨を説明して研究協力を依頼した。研究に関する主旨や回答方法、質問紙の回収法、倫理的配慮など一連の説明をし、研究者が講義室及び体育館を退室した後、同意した学生のみ回答し、質問紙を回収ボックスに提出する留め置き法にて回収した。回収後の質問紙は直ちに個別に管理番号を付けて調査値をパソコンに入力した後、鍵付きロッカーにて適正に保管した。全ての調査は 2024 年 9 月から 2025 年 1 月の期間で実施し、9 月中旬の調査では前期（4 月から 7 月）に履修した体育実技での授業に対する取り組みを振り返らせ、ルーブリックを用いて自己評価させ、その結果を事前値とした。2025 年 1 月下旬の調査では後期（9 月から翌年 1 月）の体育実技の取り組みを振り返らせて 9 月と同様にルーブリックを用いて回答させ、その結果を事後値とした。

3.4 科目担当教員による成績評価の観点

体育実技（レクスポーツ）のシラバスに明記されている成績評価基準は以下の通りである。総合評価（100%）が成績の基準とする。それは、①課題レポート（45%）3 点×15 回=45 点、②参加態度・意欲・役割の遂行（発表やグループリーダー）（20%）20 点、③試験（35%）35 点とで構成されている。まず、①課題レポートは、毎授業のまとめとして取り組んだレクスポーツの概要と気づきなどの感想を書かせて提出させた。②参加態度は、実技への参加態度と種目ごとに編成されるチームでの役割遂行である。③試験は、レクスポーツの本質的楽しさとその指導法の留意点をレポートとして提出させた。

3.5 学生による自己評価と教員による成績評価との関連

ルーブリックによる学生の自己評価と担当教員による成績評価の関連（対応）を検討するため、以下の項目ごとに分析した。ルーブリックの「①真剣・本気・全力で取り組めたか」と成績評価観点「②参加態度・意欲・役割の遂行」との関連、同様に、ルーブリックの「⑤スキルの獲得」と③試験の一部として実

施した複数種目（例えばゴルフ）のスキルテストの結果」、ルーブリックの「④授業の運営に参加できたか」と「②参加態度」に加点される各授業での役割遂行の加点得点、ルーブリックの「③仲間との良い関係を持てたか」と毎授業で提出され「①課題レポート」にて履修学生相互の関係性が記述された回数、とそれぞれの項目間の関連を検討した。

3.6 統計処理

本研究では、体育実技（レクスポーツ）の履修学生に授業の取り組み態度をルーブリックにより自己評価させた。後期授業開始直後の2024年9月調査結果を事前値、2025年1月の最終調査を事後値とし、その差を検討するため、 χ^2 検定をした。統計処理はMicrosoft Excelにて実施し、有意水準は5%とした。

3.7 本学体育実技（レクスポーツ）の授業概要

以下に、スポーツ専攻学生が履修した体育実技（レクスポーツ）の概要を示した。非スポーツ学生が履修する体育実技（レクスポーツ）とは理論領域は異なるが、実際に行った実技領域の種目は同様である。

これらの種目は例年同じになる様に授業設計しているが、履修学生の安全を考慮して怪我なく授業に参加できるように考慮して学生の希望や運動能力レベルに応じて変更している。ネット型種目では、ドッジビーやドッジボール、ソフトバレーボール、ふらばー、タスポに一などの種目から選択している。ゴール型種目では、ラージボールフットサル（直径80cmのボール）を使用して本学独自に考案したルールに則った種目やポートボールがある。ベースボール型ではY（ティー）ボールとキックベースボールを実施している。そして、ターゲット型としてグラウンドゴルフやターゲットバードゴルフ、ボッチャ、ディスコンモルックを実施している。また、2024年度からパラスポーツ種目のサウンドテーブルテニスを追加している。さらに、幼児や小学校児童を対象とした運動あそび指導にも対応できるように運動あそび種目として手つなぎ鬼や尻尾とり鬼などの複数の鬼あそび、長縄や短縄を用いたあそび、輪（フープ）を活用したあそびなども実施している。

1回目: ガイダンス・種目選択・ルーブリックの説明
2回目: フライングディスク・レクスポーツと競技スポーツの相違
3回目: フライングディスク(ドッジビー)・ドッジボール
4回目: ソフトバレーボール: 種目概要の理解
5回目: ソフトバレーボール: ゲームと技能指導法: CSSプロセス
6回目: ターゲットバードゴルフ: スキルテスト
7回目: 運動遊び: 鬼ごっこ・タグ鬼・手つなぎ鬼・氷鬼など
8回目: 運動遊び: 長・短縄・棒キャッチングスティック・輪フープ
9回目: ラージボールフットサル
10回目: タスポニー・ボッチャ
11回目: モルック
12回目: イニシアティブゲーム・ディスコン
13回目: 指導者が身につけておく技能: 蘇生法・安全管理
14回目: レクスポーツと競技スポーツの楽しさ・指導法の違い
15回目: レクスポーツの目的と活用・ルーブリックによる自己評価

図2 スポーツ学生の履修した体育実技の概要

3.8 2024年度の体育実技におけるルーブリックの活用

近年、ルーブリックを活用して成績評価に役立てる研究報告はあるが、ルーブリックを自己評価に役立てる報告5)もある。2024年度の体育実技はルーブリックを参考資料として活用はするが成績評価事自体

とはなっていない。レクスポーツでは未だ試行段階であるため成績評価の資料とし、体育実技での取り組みを自己評価させ、履修学生と担当教員の授業目標の相互確認のためのコミュニケーションの一つの資料として活用し、レクスポーツ授業の展開で生じている課題解決に活用することとした。本来であれば、ルーブリックは授業を担当する教員が目標の到達度を具体的に提示し、その評価観点を共有して、到達度の評価をする目的で使用するが、本研究ではルーブリックの特に授業での取り組みについて学生による自己評価と教員の評価の相違を確認してルーブリックの改善に役立てる基礎的知見を得ようと試行した。

3.9 倫理的配慮

研究協力を得て調査対象となった学生に対して、研究主旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては、個人情報保護を遵守し、得られたデータは統計的に処理され集団の結果とするため個人が特定されない、データは本研究の目的以外では使用しない、調査協力は自由であり、不参加や途中での中止であっても、不利益は生じないと説明し同意を得た後に回答させ、回答の提出をもって同意が得られたものとした。なお、本研究は岐阜協立大学研究推進委員会規則『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

4 調査結果

4.1 質問紙の配布と回収率

質問紙は、調査期間の2024年9月と2025年1月の授業にて体育実技（レクスポーツ）を履修する学生に配布し、回収され、欠損値のない質問紙の44名分（女子学生8名）をサンプルとして分析対象とした。回収率は、スポーツ専攻学生が95.65%（23名中22名）、非スポーツ専攻学生では100%であった。

4.2 担当教員によるスポーツ専攻学生の成績分布

表2は、体育実技（レクスポーツ）の担当教員によるスポーツ専攻学生の成績分布である。A（優れている）が44.044%（12名）で最も多くなった。次いで、AA（とても優れている）が29.63%（8名）、B（良い）が25.93%（7名）であり、C（可とする）は、0%（0名）であった。なお、不合格者が1名あったが記入に欠損があったため分析対象から除外した。

表2 担当教員による総合評価の成績分布

評価段階	AA	A	B	C	不合格	合計
人数	8	12	7	0	1	28
%	29.63	44.44	25.93	0.00	-	100.00

4.3 調査対象学生のルーブリック自己評価得点

表3は、スポーツ専攻学生と非スポーツ専攻学生のルーブリック自己評価得点である。評価観点①から⑥について、尺度ごとに人数とその割合、 χ^2 検定の結果（p値）を示した。統計的有意差が認められた項目、すなわち、スポーツ専攻学生と非スポーツ専攻学生の回答でその割り合いに有意差が認められたのは、「①真剣・本気・全力で取り組めたか」、「⑤授業を通じて新たなスキルの獲得があったか」、「⑥獲得したスキルを発揮できたか」の3項目であった。いずれも、スポーツ専攻学生の事後値が事前値と比較して減少し、非スポーツ専攻学生の自己評価得点が増加する傾向を示したその他の項目については有意差が認められなかった。

4.4 担当教員による成績評価とルーブリック自己評価

表4は、体育実技（レクスポーツ）の担当教員によるスポーツ専攻の成績総合評価を構成する4つの項目ごとの得点分布で、ルーブリックの評価観点と対応する項目の得点分布である。「参加態度-①真剣・本気・全力の取組」、「仲間-③仲間や相手との良い関係」、「運動技能-⑤スキルの獲得」の3項目の成績評価は、AA（とても優秀）と評価された学生が最も多く高値を示した。一方、「準備・役割-④授業運営への参加」の成績評価は、AAからCの段階に分布する結果となった。

表3 レクスポーツを履修した調査対象学生のルーブリック自己評価得点

評価項目	評価段階	段階		スポーツ専攻学生		非スポーツ専攻学生		p値
				事前値	事後値	事前値	事後値	
① 真剣・本気・全力で取り組めたか？	101%の取り組みが感じられる	4	%	69.23	38.16	40.91	68.18	*
			件数	18	8	9	15	0.01
	全力での取り組みが感じられる	3	%	23.08	61.9	40.91	27.27	n.s.
			件数	6	13	9	6	0.13
可もなく不可もない取り組みである	2	%	7.69	0.00	18.18	4.55	n.s.	
		件数	2	0	4	1	0.49	
全力での取り組みとはとても思えない	1	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
② ルールを守って取り組めたか？(規律)	高いレベルで守れている	4	%	57.69	76.19	50.00	72.73	n.s.
			件数	15	16	11	16	0.56
	守る意識が感じられる	3	%	42.31	23.81	50.00	27.27	n.s.
			件数	11	5	11	6	0.81
ルールを度々破ってしまう	2	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
守るつもりが感じられない	1	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
③ 仲間や相手とのよい関わりを持てたか	グッドフェロウ(仲間)としての振る舞いが完全にできる	4	%	50.00	42.86	45.45	72.73	n.s.
			件数	13	9	10	16	0.15
	グッドフェロウになろうとしている	3	%	50.00	52.38	45.45	22.73	n.s.
			件数	13	11	10	5	0.44
グッドフェロウになることを意識しているのが伝わらない	2	%	0.00	4.76	9.00	4.55	n.s.	
		件数	0	1	2	1	0.26	
バッドフェロウである	1	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
④ 授業の運営への参加ができていたか？	準備や片付けなどへ主体的・積極的に取り組めた	4	%	65.38	33.33	50.00	77.27	*
			件数	17	7	11	17	0.02
	準備や片付けをある程度は行っていた	3	%	30.77	52.38	45.45	22.73	n.s.
			件数	8	11	10	5	0.15
準備や片付けに加わるのが少なかった	2	%	3.83	14.29	4.55	0.00	n.s.	
		件数	1	3	1	0	0.17	
準備や片付けを全くしなかった	1	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
⑤ 授業を通じて新たなスキルの獲得があったか？	非常に多くのスキルを獲得した	4	%	69.23	33.33	31.82	63.64	*
			件数	18	7	7	14	0.01
	ある程度のスキルを獲得した	3	%	30.77	57.14	59.09	36.36	n.s.
			件数	8	12	13	8	0.16
スキルを獲得は少なかった	2	%	0.00	9.52	9.09	0.00	*	
		件数	0	2	2	0	0.04	
ほとんどスキルを獲得していない	1	%	0.00	0.00	0.00	0.00	-	
		件数	0	0	0	0	-	
⑥ 獲得したスキルを発揮できたか？	非常に高いスキルを発揮した	4	%	57.69	9.52	27.27	59.09	*
			件数	15	2	6	13	0.00
	ある程度のスキルを発揮した	3	%	42.31	71.43	63.64	40.91	n.s.
			件数	11	15	14	9	0.61
スキルの発揮は少なかった	2	%	0.00	14.19	9.09	0.00	*	
		件数	0	3	2	0	0.02	
ほとんどスキルを発揮できていない	1	%	0.00	4.76	0.00	0.00	-	
		件数	0	1	0	0	-	

表4 担当教員の成績評価とルーブリック得点の関連

評価項目(観点)		AA	A	B	C
参加態度-真剣・本気・全力の取組	%	55.56	33.33	11.11	0.00
	人数	15	9	3	0
仲間・仲間や相手と良い関係	%	44.44	37.04	11.11	0.00
	人数	12	10	3	0
準備・役割-授業の運営への参加	%	29.63	22.22	33.33	14.81
	人数	8	6	9	4
運動技能-新たなスキルの獲得	%	74.07	22.22	3.70	0.00
	人数	20	6	1	0

表5には、体育実技（レクスポーツ）の担当教員によるスポーツ専攻学生の成績評価の内、ルーブリックの評価観点で該当する項目の部分点を対応させ、成績評価「AA」に該当する人数とその割合を示した。いずれも統計的有意差は認められなかったが以下の傾向が見出された。まず、教員による成績評価の「態度」が「AA」となった者は55.56%であったのに対して、それに対応するルーブリック「①真剣・本気・全力で取り組めたか」では、学生の自己評価でレベル4と回答したのは29.63%と低値であった。同様に、課題レポートにて「仲間」と回答して得点が高い学生は44.44%に対して、「②仲間-仲間や相手との良い関係」では33.33%となった。授業での役割遂行により加点されたレベル4に分類された学生は29.68%だったのに対して、「④準備・役割-授業の運営への参加」では25.92%となった。さらにスキルテストにてレベル4になった学生は、74.07%であったのに対して「⑤運動技能-授業を通じて新たなスキルの獲得」では25.93%といずれも学生による自己評価の方が低値となった。担当教員による成績評価よりも学生自身による自己評価の方が低く、今回のスポーツ専攻学生では授業での取り組みが「AA」に値すると判断する者が少ない傾向が見出された。

表5 教員成績評価と学生自己評価の「AA」の関連

評価項目(観点)		教員評価	学生自己評価
参加態度-真剣・本気・全力の取組	%	55.56	29.63
	人数	15	8
仲間-仲間や相手と良い関係	%	44.44	33.33
	人数	12	9
準備・役割-授業の運営への参加	%	29.63	25.93
	人数	8	7
運動技能-新たなスキルの獲得	%	74.07	25.93
	人数	20	7

6 考察

本研究では、本学体育研究室が独自に作成した「取り組む態度」を自己評価する体育実技のためのルーブリックを使用して、その改善点を検討することを目的とした。そのため、まず学生自身による自己評価の結果をスポーツ専攻学生と非スポーツ専攻学生とで比較してスポーツ専攻学生の特性を明らかにしよう

とした。次に、スポーツ専攻学生の体育実技を担当する教員による成績評価とスポーツ専攻学生の自己評価の相違を分析した。その結果から今後の授業改善に役立てられる知見と得ようとした。

担当教員による成績評価の分布では、74.07%が「AA」と「A」となった。榎本ら²⁾の報告によると、共通体育(基礎体育)の成績表の分布が「A+」と「A」60%から65%とし、評価の重みは偏っていないと報告している。本研究の結果はそれよりも10ポイントを超えて高値となったが「AA」、「A」、「C」の評価段階に統計的有意差は認められなかった。「AA」が多くなった理由として履修学生の受講動機が考えられる。なぜならレクスポーツを選択する学生には教職(小学校教諭、中学校及び高等学校保健体育)やスポーツ指導職を志望する学生が多く、公認指導者資格の取得を希望している。そのため、履修目的が明確で、取り組む態度が優れている学生が多く、そのため高い成績に分布したと推察される。

次に、体育実技(レクスポーツ)を履修したスポーツ専攻学生の自己評価の特徴を明らかにするため同一科目名であるが異なるクラスで履修する非スポーツ専攻学生の結果と比較した。有意差が認められた評価観点ごとに推察する。まず、「⑤新たなスキルの獲得」と「⑥獲得したスキルの発揮」にてスポーツ専攻学生では得点が減少し、非スポーツ学生では増加する傾向が認められた。この理由としてレクスポーツ特有の要因があると考えられる。すなわち、スポーツ専攻学生の体育実技(レクスポーツ)の課題として挙げた『競技スポーツ志向が強い学生が多く、専門とする種目や高等学校時に経験を有する種目であれば積極的に取り組むが、レクスポーツで初めて経験する種目では消極的な取り組みになる傾向』が考えられる。毎授業後に提出を求めるレポートに、「意外と難しい」、「コツがわかるまで苦勞する」といった記述が認められた。また、本学では一つの種目を深く掘り下げるのではなく、より多くの種目が体験できるよう授業が計画されている。よって、「新たなスキルが獲得される」や「獲得されたスキルの発揮」が実感できず、実施した種目のスキルが指導者レベルには到達できなかったと考えてしまい自己評価が低値となったと推察した。一方、非スポーツ専攻学生では指導者養成を強調した授業をしていないため、初めて体験する種目であっても、経験そのものをスキルの獲得及びスキルの発揮ができたと考え、自己評価が高くなったのではないかと推察した。また、スポーツ専攻学生は、高いレベルでなければ「スキルを獲得した」および授業で展開されるゲームで勝たなければ「スキルが発揮できた」と実感しなかったことが、「真剣・本気・全力で取り組めていない」と考え参加態度の自己評価が低値に作用したのではないかと推察される。これらの結果から、今後は「技能」についてもルーブリックを作成し、形成的評価⁹⁾としてフィードバックできるシステムを構築しなければならない。また、本学独自の「取り組み」に関するルーブリックでは「スキルの獲得」と「スキルの発揮」に関する達成水準に関する記述内容の再検討が必要である。さらに、今後は、レクスポーツや生涯スポーツに関する理解や認識を深める学習実施し、「知識」に関する評価観点の追加をしなければならない。

7. 結論

本研究では、本学が独自に作成した体育実技に「取り組む態度」を評価するルーブリックがある。それを使用し、その改善点を検討することを目的とした。また、学生自身による自己評価と担当教員による成績評価との相違を分析し、授業改善に役立てられる資料を得ようとした。

その結果、以下のことが明らかとなった。

(1) 体育実技(レクスポーツ)の成績評価は、「AA」と「A」に74.07%が分布したが、その分布に統計的有意差は認められなかった。

(2) 学生による自己評価では、スポーツ専攻学生と対照群の非スポーツ専攻学生に「参加態度」、「スキルの獲得」、「スキルの発揮」にて有意差が認められ、スポーツ専攻学生の得点が減少した。

(3) 教員による成績評価と学生自による自己評価の関連では自己評価の方が低くなる傾向があった。スポーツ専攻学生では経験したレクスポーツ種目にて高いレベルでのスキルの獲得とその発揮が求められると認識しており、それが参加態度の自己評価にも作用していると推察される。よって、ルーブリックのスキルに関する達成水準に関する記述内容を変更する必要がある。

参考文献・引用文献

- 1) ダネル・スティーンズ, アントニア・レビ (2014) ルーブリックの基礎, 大学教員のためのルーブリック評価入門 (佐藤浩章監訳, 井上敏憲, 俣野秀典 訳), 玉川大学出版, p 2-10
- 2) 榎本靖士, 松元剛, 吹田真士, 鍋山隆弘, 金谷麻理子, 奈良隆章 (2014) 共通体育における成績評価に関する問題の検討, 大学体育研究第 36 号, p 87-90
- 3) 岐阜協立大学 (2024) 岐阜協立大学について, 大学概要, 3つのポリシー, 経営学部スポーツ経営学科, ディプロマポリシー, - <https://www.gku.ac.jp/about/outline/policy.html>, (最終アクセス 2025年2月26日)
- 4) 岐阜協立大学体育研究室 (2024) 2024年度体育実技の教育目標, 岐阜協立大学体育実技・スポーツ実習関連科目実施要項, p 1
- 5) 林康弘, 安田秀喜 (2017) コンピューター演習におけるルーブリック評価の導入, 教育システム情報学会・JSiSE研究会研究報告第 32 巻第 2 号, p 71-78
- 6) 北川明 (2024) 評価の種類 (形成的評価), ルーブリック導入講座, 医学書院, p 5-8
- 7) 松元剛, 榎本靖士, 金谷麻理子, 鍋山隆弘, 秋山央, 吹田真士, 奈良隆章, 岡出美則, 山田幸雄 (2013) 平成 24 年度 SPERT 研究プロジェクト報告 大学体育における学修成果可視化のためのルーブリックに関する研究, 大学体育研究第 35 号, p 121-127
- 8) 文部科学省・中央教育審議会 (2008) 学士課程教育の構築に向けて (答申), https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, (2025年2月26日最終アクセス)
- 9) 文部科学省・中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申), https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2025年2月26日最終アクセス)
- 10) 文部科学省・中央教育審議会 (2018) 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申), https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm, (最終アクセス 2025年2月26日)

付記

本研究の主旨をご理解の上、調査に快く協力頂いた本学体育実技（レクスポーツ）を履修した学生の皆さんに心から感謝いたします。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。